

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷五十二第

行發日一月二十年二和昭

論叢

社會黨の農民獲得運動

法學博士

河田 嗣郎

租 稅 道 義

法學博士

神戶 正雄

徳川時代に於ける長崎の支那貿易

文學博士

矢野 仁一

スミス「富國民論」の基礎的考察

法學士

石川 興二

文化現象の凝集作用

法學士

恒藤 恭

說苑

我が國の地方費國庫補助制度

經濟學士

中川與之助

雜錄

大名領地について

經濟學博士

本庄榮治郎

獨逸の租稅收入

經濟學博士

沙見 三郎

聚落に關する三新著

經濟學士

黒 正 巖

法 令

銀行法施行期日ノ件・銀行法ニ依ル地域指定ノ件・銀行法ニ依ル銀行ノ特例ニ關スル件・銀行法ニ依ル人口一萬未滿ノ地ヲ定ムルノ件・銀行法施行細則

附 錄

本誌第二十五卷總目錄

アダム・スミス「富國論」の基本的考察

石川興 二

一 基本的研究方法に就て

經濟學史上に於けるアダム・スミスの大著「An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations」(「富國論」)を如何にして客觀的基本的に研究し得るかを考へんとする(1)ことが本論文を一貫するところの私の立場である。學的研究は總て客觀的でなければならぬ、而して客觀的ならんが爲にはその研究が基本的でなければならぬのである。然るに今日スミス經濟學の研究について眞に基本的ならず従つて客觀的ならざる常識的考察が多く見られ得るのである。斯くて經濟學祖としてのスミスの眞意義は看過せられ、スミスの經濟學をブルジョア經濟學なりとしてマルクス經濟學に對立せしめまたはその本質をリカルドの經濟學の本質と同一視するが如き今日最も普通に見らるゝ誤謬が起り來ることは偶然でないのである。

總て偉人の傑作はそれ自身獨立の偉大なる生命を保持して人類文化史上に嚴として存するもの

1) 私が此著を「富國論」「國富論」「諸國民の富」等と呼ばずして特にスミス經濟學の眞の目的より「富國論」と呼ばんとする所以は後にこれを明にする。

であるが故にこれを眞に理解せんとするものは先づこれを一個の精神體として全體の統一的に把握することに努めなければならぬ。而もこの統一的全體をその成立の基礎的諸條件より基本的に理解する時初めてその眞生命を把握し得るのである。然るにこれが爲には我々は先づ經濟學成立の基礎的諸要因なるものを組織的 (systematisch) に明にし、然る後この組織的に明にされたところのものを用いて經濟學史上の諸經濟學的體系を歴史的 (historisch) に研究することを要するのである。

こゝに私が試みんとするところは經濟學成立の基礎的諸要因の組織的研究ではなくこの組織的研究を前提としてこれを經濟學史上のスミスの大著に適用し以てこれを統一的基本的に理解せんとするにあるのであるが今その考察方法の過程のみを豫め簡單に述べて置かうと思ふ。

經濟學について、その Matter 素材と Form 形式とが即ち研究對象と研究方法とが經濟學成立の基礎的諸要因であることは何人にも異存のないことであらうが然し基礎的諸要因はこれのみではないのである。即ち一つの經濟學的體系は一つの生命體であり精神的産物であるが故にそれはこれを成立せしめて居るところの目的がなくてはならぬのである。アリストートルが目的因 (final cause) と云へるものは即ちこれである。然し更にこの目的に従ふてその研究方法をもつてその研究對象を研究するところの能力因 (efficient cause) なるものが考へられねばならぬのであ

1) 歴史的的研究が方法的學的ならんが爲には常に組織的研究を前提としなければならぬことは嘗て述べたところである。(本誌、本年十月號二八一頁二九二頁參照)即ち經濟學史の方法的的研究は「經濟學本質論」を前提とせねばならぬ。

る。斯くしてアリストートルが事物成立の要因について擧げてゐる四要因 (Four causes) 即ち質料因 (material cause) 形相因 (formal cause) 目的因 (final cause) 能力因 (efficient cause) が一つの經濟學的體系についても考へられねばならぬのである。而してこの基礎的諸要因の各が經濟學の成立に對して有する意義はその各につき後に明にせんとするところであるが、要するにこれ等四者はそれなくしては經濟學が成立し得ないと事ふ意味に於て各が經濟學成立の基礎的要因である。

斯くの如く一つの經濟學的體系はこの四要因より成つて居るものであるが故に今經濟學史上に於ける一經濟學的體系を統一的基本的に理解せんとせば、これをこの經濟學成立の基礎的四要因より明にしなければならぬのである。然し一つの經濟學的體系を眞に基本的に明にせんとせば更に進んでこの基礎的四要因の各々の基礎をなして居るところの基礎的諸條件であるところの其の學者の個人的諸事情並にその歴史的社會的諸事情をも明にしなければならぬ。

斯くの如く、その基礎的四要因をそれが基礎的諸條件より先づ基本的に理解しこの基本的に理解されたる基礎的四要因よりその經濟學説を基本的に理解せんとすることは、即ち經濟學の基本的なる本質的構造に即して經濟學を歴史的に究明せんとするのであるが故に、この方法によつて一つの經濟學的體系は最も基本的且最も客觀的に究明し得らるゝ譯なのである。而してかくの

1) 本誌、本年十月號第二九二頁參照、

如き方法をもつてスミス「富國民論」を直接の對象として研究することが即スミス富國民論の基本的研究であつて本論文に於て私がある一端を試みんとするところのものである。

今この論に進み入るに先立つてスミスの文化史的地位の特色が先づ明にされて居らねばならぬ。

二 スミスの文化史的地位の特色

スミスが生れし十八世紀の初めより彼の大著が出する一七七六年に至る頃までの諸文化域の狀態を一言にして云ふならばそれは尙多く中世的なものであつたのであつて近代の初めより始まつた近世的なるものはまだその仕事を成し遂げて居なかつたのであつた。この彼の文化史的地位に於てスミスは彼以後の多くの經濟學者と大いに趣を異にして居るのである。即彼以後の經濟學者の文化史的地位はリカルドウにしろマルクスにしろこの近世的のものが一應その仕事を成し遂げた時だつたのである。以下このスミスの文化史的地位の特色を簡單に考察して見よう。

即ち質的に極めて高きギリシヤ文化について此を量化し量的に極めて大なる文化を打立てたるローマが没落すると共に燦然たる古代文化は民族大移動の混亂の中にその姿を消したのであるが基督教の教權と封建制度とは中世社會に強制的秩序を打立て、社會生活思想生活の總てをその束

縛干涉の下に置いたのである。然るに近世の初めより自覺し始めたる自由の精神は各方面よりこの中世的束縛の精神に反旗を翻し初めたのであるが而しその戦は容易なるものではなかつたのである。

十七八世紀に於ける英國は其自律的なる國民性よりして最もよく自由への歩を進め文運また盛であつて他の歐洲諸國の模範となつた程であるが而もスミスの當時に於てすら尙中世的遺物たるまたは中世的精神に立てる干涉と束縛を打破し去ることは出来なかつたのである。

例へば十七世紀に於ける英國の憲法上の紛争は議會政治を原則とするに至つたとは云へ十八世紀の英國代議士は貴族的中等社會を標準とし主として廣大なる地主から選出され、これに若干の都市の資本家が參加したものであつて従つてその議會はまだ頗る保守的のものであつた、而してこの選舉權が擴張されこの議會政治が民主政治となるが爲めには其後尙多くの時間を要したのであつた。

次に學界について見るも、十七八世紀の英國はベーコン、ニュートン、ロック、ヒューム、等の大學者を排出し當時の歐洲の學界を代表したとは云へ、而も一般の學界は未だ尙ほ中世的因習に停滯して居たのであつて當時多くの大學に於て教へられつゝありしところの如きも尙ほ依然基督教の奴僕となつた中世的の學的體系であつて爲に教育の効果を阻害すること甚だしきものであ

1) このことはスミス自身富國民論中に述るところによるも明である。 Wealth of Nations edit. by Cannan. I p. 436. p. 68 等

つたことはスミス自身彼の大學生活の體驗より富國民論の中に強調して居るが如くであつた。¹⁾

經濟的社會にあつても同じく新なる經濟的自由の精神は中世的なる經濟的干涉に對して高まり來りつゝあつたとは云へ、而も國內經濟に於て職業組合徒弟制度其他中世的の干涉が存続しました外國貿易に關する獨占干涉が盛に行はれつゝあつたのである。スミスはこれ等中世的なる經濟干涉の制度が富の生産及分配の上に頗る有害なることを富國民論中に於て論證し且力説して居るのであるが而もそれが容易に打破す可からざる勢にあつたことはスミスをして富國民論に於て「實に商業の自由が英國に於て完全に打立てられることを期待することの無理なることはユートピアが英國に於て建設さるゝことを期待するが如し²⁾」と歎せしめてゐることによりても明であらう。

スミスが其大著を公にせし一七七六年は正に米國が英國の殖民地に對する極度の干涉政策に反抗して獨立宣言を發した年であつた。而してスミスの富國民論と其後現はれたる經濟學史上の名著リカルドウの經濟原論(一八一七)マルクスの資本論(一八六七)等との間には中世的制度を打破し近代的自由を確立する上に最も顯著なりし二大事件即ち産業革命の展開と佛蘭西革命の爆發とが介在して居るのである。實にスミスはこの産業革命の直前にあつて中世的干涉に對して經濟的自由を叫んだのであつた。

1) Ibid. II p.p. 258-260

2) Ibid. I p. 435.

なるものを打ち立てんことを以てその使命としたのであるが、然らば彼はこの新なるものを打ち立てる爲の理想を何處に求めたであらうか。

抑も近世は中世を非とし古代文化を典型として新なる文化を打立てんとせしルネッサンス精神より起り來つたのであるが同じく中世を非とし新なるものを打立てんとするスミスもまたその理想の中心を古代文化に於て求め以て彼の經濟學を建設したのである。

即ち後に富國民論に於けるスミス自身の思想より明にせんとするが如く、彼は經濟學の學問的本質についても彼以後のリカルドゥ、マルクス等の如くに近代的の物理學的又は生物學的自然科學に規制されずむしろ古代の精神哲學にその範を求めたのである、また社會生活の理想についても彼はこれを古代の社會生活に求めたのである。彼が屢々誤つて考へらるゝが如くに個人的自由主義者ではなくしてむしろ全體的自由主義者であるのもこれが爲である。要するにリカルドゥ、マルクスにとつては近世的なるものは既に確立したものであつて彼等を規定する力となつて働いたのであるが、スミスにとつてはこの新なるものは中世的なるものゝ中に生ひ立ちつゝあるものであつて未だリカルドゥ、マルクス等に對するが如き規定力とはならなかつたのである。

而もこのルネッサンス的精神に立てる彼の理想の實現を可能ならしめたところの手段は、後に明にするが如く、彼はこれを新に生れつゝありしところの近世的なるものに於て求めたのであ

る。

斯く彼の立場は古代と中世と近世とを包括して立つて居るのであつて、こゝに經濟學史上に於けるスミス獨特の立場があるのである。このことがスミス經濟學全體に如何に重要な特色を與へ彼の經濟學を諸他の經濟學より本質的に區別するに至れるかは後に於て明にせんとするところである。

以上考へられたスミスの文化史的地位は彼の環境に就てあるが更に彼自身に内在せる歴史的契機であるところの國民性をもまた考慮に入れねばならぬ。スミスが英國人であつたことは、マルクスが獨逸育ちのユダヤ人であつたことの如くに、彼の經濟學全體に影響することは後に明にされるところである。

三 スミス經濟學の能力的基礎

一つの經濟學的體系をそれが目的、對象、方法に從て成立せしむる方となるところのものはその學者の能力であるがまたこの目的、對象、方法そのもの、確立を可能ならしめるところのものもまたその學者の能力である。かくして私はこゝにこの意味に於てスミスの富國民論を成立せしめた能力的基礎としてスミスの素質及素養を考へたいと思ふのである。ゼー・エス・ミルは

“A person is not likely to be a good economist who is nothing else” 云々と居るがこれは秀れた經濟學者に於て實證されて居るところのものであつて、スミスをして偉大なる經濟學者たらしめたところの能力的基礎は彼の人格の偉大、事實的體驗の豊富、歴史的社會的實在に關する歴史的並に組織的研究及び哲學的素養の深さと廣さ等であつた。故にスミスの經濟學を統一的基本的に理解せんと思はば先づ此等の各々をそれが成れる事情と更にそれが彼の經濟學に對する關係とに於て考察して置くことを要するのであるが、而もかゝる考察は經濟學徒たらんとするものゝなすべき素養の何たるかを經濟學史上の偉人の事實より學ぶに於ても意義あることである。先づスミスの人格の考察より始めようと思ふ。

(一) スミスの人格的素養 「精神科學の中に働く理解力は全人である。精神科學に於ける大なる貢獻は單に力強き知力より來るものでなく人格的生命的偉大さより來るものである」とは精神科學の基礎付をもつて其使命とせしディルタイの名言であるが、スミスの經濟學を偉大ならしめたものは先づその根柢にあるスミスの偉大なる人格であつた。

スミスの性格が幼少の頃より既に極めて愛情に富んで居たことは彼の生涯の種々なる事件を通して見られるところである。彼は殊に温情深き慈母にはぐくまれて生ひ立つたのであるが、彼はこの母が九十の高齡にて死するまで六十年に渡り孝養の限りを盡してその慈愛に報ひたのであつ

た。彼はかく愛情に富んだ家庭生活を享けたのみならずまた社會生活に於ても極めて順調であつたのである。又彼は最初の學校時代に於て一面性熾烈なりしが而も他面極めて親切にして大よくなる氣質を有したるが爲に友に好愛せられたと云はれて居るが彼は終生友情に富んで居たのであつた。要するに彼の一生を通して變らなかつた温和にして而も一面情熱的な彼の愛情は彼の幼時よりその性格の本質をなしたまた彼の順調なる生涯の中に發展したものであつた。

かくして彼が世の弱者に同情深かつたことは彼が倫敦より移り來れる若きワットを排他的なるグラスゴウの鐵工組合より救ふて大學に雇ひ入れ種々なる便宜を與へた一事件に於てもよく現れてゐるのであるが彼をして經濟學の研究を以て彼の一生の最も重要な任務たらしめ而してこれをよく成し果げ得しめたところの根源力も實にこの彼の人類愛にあつたことは彼の經濟學の目的について次に述ぶるが如くである。従つて彼の「富國民論」にはその全體に渡つて彼の人間的愛情より出た温度が流れて居るのである。

彼の人格は情愛に富みしのみならずまた眞理に對する良心に於て富んで居た。これまた富國民論を偉大ならしめたる重要な源動力であると思ふ。彼が其著にいたく推敲を重ねまた死に面するに及んでその友人をして遺稿を燒棄せしめたるが如きもまたその學的良心の現れとして考へるべきことが出来るのである。

(二) 事實的體驗の豊富 次にスミスの經濟學を偉大ならしめたるものは彼が社會を事實的に體驗することが豊富であつたことである。彼は事實觀察を重ずる性格を有し十數年の長き間當時經濟的に勃興しつゝありしグラスゴウに在りて絶へず聰明なる實業家と親しく交り、また大學を退いて後二年半に渡つて大陸に遊んだのであるが、彼にしてもこの豊富なる體驗なかりせば彼は決してかくの如き偉大なる經濟學者たるを得なかつたであらう。

(三) 歴史的社會的諸學の素養 次にスミス經濟學をして偉大ならしめたる能力的基礎は歴史的社會的實在全般に關する彼の歴史的並に組織的研究の素養であつた。即ち歴史的社會的實在に於ける諸文化域は連帶的關係に立つて居るものであるが故に其一領域例へば經濟的領域を究めんとせば諸他の文化域に關する知識をも備へて居らねばならぬのであるがスミスは正にかゝる素養を有して居たのである。

スミスは既に大學時代よりこれ等の諸學に興味を有し研究してゐたのであるが然し十四年に渡る長き間大學教授としてこれ等の學を講せしことは彼をして深くこれ等の社會諸學及歴史學に精通せしめたと考へられる即ち彼自身富國民論中に於て「凡そ何人にも、何等か特定の部門の學を年々歳々教ふる必要を課することは、實に、その人をして自ら其學を完全に研究せしむる最有効なる方法なるが如し」と云ふて居るがこれ蓋しスミス自身の體驗を物語つて居るものであら

1) Ibid. II p. 297.

う。また當時英國に於て彼の親友なるヒューム等傑出せる歴史家が排出して歴史的研究の盛であつたことがスミスの研究を大いに利したことは云ふまでもない。

斯くてスミスは當時の社會を豊富に體驗せしのみならずまた遠く古代の社會にまた廣く東洋の社會に至るまでその諸種の文化的事實を歴史的に體驗したのであつて富國民論中に於ける豊富な歴史的事實の考察は彼の經濟學の特色をなすものであるが、それは正にこの歴史的素養に基くところのものである。而して彼の古代ギリシヤ、ローマ文化の研究が彼の經濟學に及ぼせる影響はこれを後に明にせんとするが如く特に注意さるべきものである。

また彼は社會諸現象を研究せしのみならずこれにつき著書をなさんと志して居たことは「道德情操論」の末尾に於て既に明にされて居るところであるが彼の“Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms.”はグラスゴー大學に於ける彼の講義が死後發見せられたところのものであり而して富國民論は主として此“Police”に相當する部分が發展したものであるが而も第五篇の中にはこゝに云はるゝ歳入 (Revenue) の外に更に歳出に關して軍備 (Defence)、司法 (Justice)、青年教育、宗教教育が其等のものゝ歴史的考察と共に論せられて居ることは注意すべきことである。

(四) 哲學的素養 次にスミスの經濟學を偉大ならしめたる能力的基礎として重要視すべきは彼の哲學的素養の深かつたことである。彼は學生時代より既に哲學の研究を好んだのであるが長じて

1) The theory of moral sentiments.

代表的なる哲學者であり且歴史家であつたヒュームと親交を結んで終生かはらなかつた。富國民論中に於て彼がヒュームを“by far the most illustrious philosopher and historian of the present age”¹⁾と呼べることは彼がこの親友より如何に多くの歴史的並に哲學的啓發を受けたるかをも示すものであろう。また彼の名聲を一時に高からしめた「道徳情操論」は彼がグラスゴー大學に於ける精神哲學の教授としての講義に基くものであつたが、彼はその中に於てハッチェンソン、ヒューム等の思想を繼いで人間性を研究して居るのであるが道徳的行爲の根柢を sympathy (同情)に見た彼は富國民論に於て經濟行爲の根柢を經濟心に於て見ることによつて彼の經濟學研究の礎石を置くことゝなつたのである。このことについては後に詳しく考察しよう。

彼の富國民論は彼の人間性研究に立つて居るのみならず彼の人生觀及學問論の上に打立てられて居るのである。この彼の人生觀は彼の經濟學の目的の根柢として後にこれを考察するが故に次には彼の學問論を明にし以て彼の經濟學の目的、對象、方法の考察に進む土臺としたいと思ふ。

四 「富國民論」に現れたるスミスの學問論

彼が富國民論を著せし時學的體系全體に對し抱いてゐた見解の骨子は富國民論そのものの中に於てうかがうことが出来るのである。即彼は富國民論第五編に於て學校教育を問題とするに當り學

1) Ibid. II p. 275.

の體系を論じて一方當時歐洲の諸大學に尙引きつゞき行はれつゝあつた中世的學的體系を以て學をして宗教の奴隷とし形而上的に墮落せしめたるものであるとして全々これを斥け他方古代ギリシヤの學的體系をもつて完全なるものであるとして居るのである。即ち「古代ギリシヤ哲學は大部門に分たれてゐた、物理學又は自然哲學 (Natural philosophy)、倫理學又は精神哲學 (Moral philosophy)、論理學 (Logic) が即ちそれである。而して此一般的分類は事物の本質に完全に一致して居る」と云ふて居る。當時存続せし中世的なる經濟的制度を排せんとする彼が中世的なる形而上學的體系を排し而して富國民論中に屢々見らるゝ古代への憧憬をこゝにも現せることは注目すべきことである。而してスミスは此中の精神哲學の一部門として彼の經濟學を打立てたのであるが故に彼の經濟學の學的本質を明にせんとせば先づ彼の論するところに従つてこの精神哲學の學的本質を他の諸學に對比せしめて明にしなければならぬ。但しスミスが富國民論中に於て精神哲學の本質に關説して居るところは簡單であるが而もその中には「富國民論」全體に展開られて彼の經濟學的體系を他の經濟學の體系より區別すべき特色となる優れたる骨子が既に伺はれることは富國民論の基本的研究にとつて注意すべきことである。

スミスは此等三種の學の中第三の論理學については他の二學即自然哲學並に精神哲學の研究を正確ならしめんが爲に起り來つた學であるとして居るが故にこれは他の二學の研究の爲の學であ

1) Ibid. II p. 256. 斯く彼がこれを事物の本質に完全に一致して居ると云へるが故にこゝに彼の當時有せし學問論をうかがひ得るのである。

ると云ふことが出来る。

次に自然哲學と精神哲學との區別を明にすれば精神哲學の本質を明にし得る譯であるが、こゝに先づ注意すべきことは、スミスが精神哲學をもつて自然哲學と共に、形而上學たる可らずして經驗科學たらざる可らずとして居ることである。このことは彼が自然哲學の論の中にその發達を述べ、諸自然現象は最初は神の直接の働に歸し説明せられたが後に至つて人々に一層親しみのある諸原因より説明さるゝ様に努めらるゝに至つたことを述べて居るによつても明であるが、また此古代の三種の學を説明したる後古代より中世に入つて普通の經驗に訴へ能はざるものが此等の學の中に次第に領域を擴め學が形而上學的となれることをもつて學の墮落なりと論せるより見るも、²⁾更に“Essays on Philosophical Subjects”中に於て「他の點に如何によく支持されて居ても結合原理が總ての人々に親みあるものでないものは世間に信用を博することは出来ない」と云ふて居ることによつても明である。かくて彼がこゝに自然哲學及精神哲學と云へるものは今日經驗科學と云はるゝものであることが知り得るのである。

この形而上學に對する彼の態度を明にして置くことは彼の經濟學の眞意を正しく解するが爲に先づ必要なることである。例へば彼が富國民論中に於て *invisible hand* なる語を用ひたる故を以てその經濟學を形而上學的なりとなす者がまゝあるがかくの如きは彼の形而上學に對する此態度

1) Ibid. p. II p. 256.

2) Ibid. pp. 258 9.

を知らざるより起る誤謬である。彼はかの形而上學に於けるが如くこの超經驗的な概念を以て經濟現象の自然的調和を説明する根據としたのではなく、この自然的調和の原理はこれを第一篇二兩篇の長きに渡つて既に經驗科學的に説明し置き然る後に於て微妙さを讚歎してこの語を用ひてゐるのであることを注意しなければならない。即ち彼はその學的本質が經驗科學的であるべきことを明に自覺せる精神哲學の一部門として經濟學を打立たたのである。

次にこの兩者の研究對象について見るに自然哲學は天體現象動物現象等廣く自然現象を以て對象とするに對し精神哲學は人間生活に於ける人々の行動 (the conduct of human life) を研究對象とするものであることを明に示してゐるのである。¹⁾ 今日の經濟學が其生産論に於て屢々自然的條件を過度に取扱ひ研究對象上よりも經濟學が精神科學なりや自然科學なりやを疑はしむるものあるに反しスミスはかくの如き研究對象に關する自然科學的誤謬に陥ることなく、明に "Whatever be the soil, climate, or extent of territory of any particular nation, the abundance or scantiness of its annual supply must, in that particular situation, depend upon those two circumstances"²⁾ と述ぶ自然的條件の生産に關係することを認めながら而もこれ自體を富國民論に於て問題とすることなく勞働の質及量を決定する非自然なる事情のみを論じて居ることは、スミスがこゝに示して居る研究對象の區別に關するこの見解を徹せしめて居るのである。

1) Wealth of Nations. II p. p. 256-7.

2) Ibid. I p. 2.

次にこの兩者の研究方法について見るに、スミスは精神科學は行爲の當不當 (proper or improper conduct) を問題とすることを認めてゐるが故に、その研究方法は自然現象のそれに於けるが如く單に存在 (sein) を問題とするのみでなく、價值判斷等今日の學問論に於て所謂實踐的方法がその中に用ひらるゝことが意味されて居るのである。事實彼が富國民論中に於て理論的研究方法、歴史的研究方法の外に更に實踐的研究方法を適切に用ひたることはリカルドウ、マルクス等の自然科學的意識に規制せられし經濟學に於ては見得ざるところであるが、その骨子は既にこゝに見らるゝのである。

斯くてスミスの所謂自然哲學と精神哲學との別は今日の學問論に於ける自然科學と精神科學との別に大體相當すべきものであることが知らるゝのであつて従つてスミスが精神哲學の一部門として打立てたる彼の經濟學は今日所謂精神科學に相當すべきものである。

次にスミスは道德哲學の目的について述べてゐる。即それは「單に個人としてのみならず家族、國家及人類的大社會の成員としての人間の幸福と完成 (the happiness and perfection of a man) が何に存するかを研究すること」¹⁾ が精神哲學の目的であつて上述の總ての哲學中遙に最も重要なもの (by far the most important of all the different branches of philosophy) であることを述べて居る。而して彼はこの彼が最重要視せし精神哲學の一部門として同じく人間の幸福完成を目的とす

1) Ibid. II p. 256.

2) Ibid. II p. 259. これ正に今日の精神科學論が精神科學の窮局の目的とする人道的 (humanistich) 理想である。

る經濟學なる新な學を確立する爲に彼の生涯の最善の努力を捧げたのである。

扱て上述の如きギリシヤ的精神哲學の精神に立つてスミスが彼の經濟學を打立てたと云ふことを先づ知ることが、彼の經濟學の研究に對し有する意義は以下明にさるゝであらう。

五 スミス經濟學の目的

アリストートルは “the final cause is something for whose good the action is done, and something at which the action aims”¹⁾ (目的因なるものはその爲になる様に行爲がなされ而して行爲がそれを目的とするところのものである) と云ふて居るがスミス經濟學の目的は即スミス經濟學の目的因であつて彼の經濟學的研究の一切がこれを目的としこれが爲になされて居るところのものである。故にスミス經濟學を根本的に理解せんとするならば、またスミス經濟學の目的を明にしなければならぬのである。

富國民論はスミスが彼の生涯の最大なる使命とし彼の學的生命の最も盛であつた十數年の間専らその心血を注いだ大著である。故に若しこれを以て單に經濟的對象界に對するスミスの知的興味¹⁾の產物であるとして解せんとするならばこの大著の眞意を根本的に汲み取ることは到底出來ないのである。斯くして我々は經濟的對象に對するスミスの知的關係の根柢に更に深く潜在するス

1) Aristotle; *Metaphysica*. trans. by Ross. p. 1072

ミスの經濟的對象界に對する情意的關係又は人格的關係とも云はるべきものを理解しなければならぬ。而してこれが即ちミス經濟學の目的をなすところのものである。

前述せしところの人間愛に富む彼の性格が、經濟的對象界に對してこの人格的關係を生ずるに至れる内面的契機を富國民論自身に於ける彼の思想に於て求めて見ることは彼の經濟學の目的を根本的に理解せんが爲に意義あることであると思ふ。

彼は初め英國教會の僧侶たらしめられんが爲にオックスフォード大學に送られたのであるが、既にそれ以前グラスゴー大學に於て、後年彼がその精神哲學の講座を繼承するに至るべき恩師 Hutcheson の講義により強き感化を受けたる彼は、當時尙中世的神學であつたオックスフォード大學の正規の學科を好まずして古典、倫理學、政治學等の研究に全力を擧げたのである。富國民論中に於ける以下の彼自身の語は彼が中世的超現世的のものよりも古代的超現世的なるものへ興味を有するに至れる内面的契機をよく現はして居ると思ふ。即ち彼は「人間の幸福並に完成が何に存するかと云ふことは、古代の精神哲學が研究せんとした目的であつた。この精神哲學に於ては人生の義務とは人生の幸福並に完成に役立つことであるとして考へられた。然るに精神哲學並に自然哲學が神學に役立つものとしてのみ教へらるゝに至つた時に於ては人生の義務は來世の生活の幸福に主として役立つものとして考へられた……詭辨と禁欲的道德とが多くの場合學校

教育の精神哲學の大部分を形成した。斯くの如くにして哲學の總ての部門中遙に最も重要なものが最も甚しく腐敗したところのものとなつた。」¹⁾と云ひ而してまたかゝる状態が當時歐洲諸大學の多くのものゝ實狀であることを述べてゐる。即ち前述せしところの、彼の性格をなす愛の精神は現世に於ける人生の幸福完成を重するギリシヤの人道主義的的人生觀に觸れて社會の人々の幸福と完成とを念とする人道主義的精神となつて發展し斯くて彼は成長するにつれて人生の幸福と完成とを目的とする精神哲學の研究に愈々没頭するに至つたことは當然と考へらるゝのである。即彼は僧職の彼の趣味に適せざるを知つて友人等の忠言にもとつて歸國したのであるが後グラスゴー大學の精神哲學の講座を担当するに至り彼が最重要視する人生の幸福と完成を目的とする學を自ら講ずることゝなり一七六三年大學を去つて佛國に遊ぶまで十四年に渡つてこの講座に甚だ満足しつゝ止まつたのである。

然るに彼が其中特に經濟學に最善を致すに至つた所以は此人生の幸福と完成が社會の大多數の人々に於て經濟的生活に拘ること著しきことを體驗したが爲であらう。即彼は富國民論の中に於て現代社會に於て財産あり地位ある人々は人間の貴い能力を發展させることが出来るが一般の人にとつてはそうは行かぬ。「其等の人々は教育の爲に用ひ得る時間を殆どもたない。彼等の両親は幼少の時代に於てすらも彼等を養育することが殆ど出来ない。彼等が働くことが出来るや否や

1) Ibid. II. p. 259.

彼等は彼等の生活資料を得ることの出来る何等かの仕事に従事しなければならない。更にその仕事は一般に單純且一律であつて理解力に殆ど訓練を與へない。然るに、これと同時に、彼等の勞働は間斷なく且激烈であるが故に彼等は他の事柄に従事しまたはこれを考へることにすらも殆ど暇はなく而してそう云ふ氣には更になれないのである。」¹⁾と云ふてゐる、また現代の社會に於ては「少數の人の能力は大いに發展せしめられるが而も、社會の大多數の人々 (the great body of the people) に於ては人間の性質の高尙なる部分の總ては (all the nobler parts of the human character) 大いに削り去られ消滅させらるゝ、」²⁾と云ふてゐる。而も彼は「全々心に於て存するものであるところの幸福又は不幸は身體の状態よりも心の健康又は不健康、完全又は不完全なる状態に必然に依存するものである。」³⁾と考へたのである。即生活の貧困が社會の大多數の人々にとつて眞の人生の幸福であるところの人間の精神的諸能力の發展に大なる障害となつてゐる事實を彼は明に見たのである。

於茲社會の人々の幸福と完成とを念とする彼の人道的精神は社會の貧困なる多數の人々の經濟的生活を増進せんとする公益的精神となつて發展し來ることは當然であつた。即ちこゝに經濟的對象界に對する彼の人格的關係が成立するのである。かくて彼は此人格的關係の上に立つて人間の幸福と完成とを目的とする精神哲學の中に人間の經濟的生活を増進し以て人間の幸福と完成を

- 1) Ibid. II 269.
- 2) Ibid. II 269.
- 3) Ibid. II p. 272.

計ることを目的とする經濟學なる一部門を建設するが爲に彼の心血を注ぐに至つたのである。彼が經濟學を富國論中に於て“that very important science”（かの甚だ重要なる學）と呼んで居ること以上の意義に於て解すべきであらう。

彼はこの學の目的を明示して「第一は人民に對して十分なる収入又は生活資料を供給すること（to provide a plentiful revenue or subsistence for the people）であり……而して第二は公の仕事に對して十分なる収入を國家に供給することである。……」¹⁾と云ふて居るがこの二つの目的は結局一に歸るものである。何となれば後の収入は國民の収入より得られ而も國家を通し結局人民の生活の爲に用ひらるべきものだからである。²⁾かくて結局國家の成員としての人々即國民の經濟的生活を豊にすること即この意味に於て「國民を富ます」ことを以て彼は彼の經濟學の目的としたのである。従つて彼は「諸國民の富の性質並にその諸原因の研究」(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)をもつて彼の經濟學の課題とするに至つたのである。

かくて wealth of nation（國民の富）なる概念は、彼の經濟學の目的を最も簡明に表はし居るところのものであるが故に彼の經濟學の目的を更に明確にせんとせばこの「國民の富」の性質を彼の述るところに従つて明確に規定することを要するのである。彼が“Nature of the Wealth of Nations”（國民の富の性質）を明にすることを重じ其諸原因の研究と並べて彼の大著の題名とせし所

1) Ibid. I p. 395.

2) ミスは第五編に於て國家の支出を専ら國民の生活に對する必要如何を標準として定め更にそれが爲の收入につき國民の富を最害せざる方法を研究して居る。

以はこの重要な意義を有するところのものが屢々誤つて解せられ爲に經濟學の眞目的が誤られ従つてまた經濟學研究全體が不當なるものとなつたと考へたが故である。例へば彼は重商主義について「富が貨幣即金銀より成ると考へることは俗見である」が「この俗見の結果歐洲の總ての國民は自國に金銀を堆積する爲のあらゆる可能なる手段を學んだ」而してこの結果が重商主義の原理となつたのであり斯くて重商主義はこの意味に於て國を富ますこと (to enrich the country) をその目的とし従つてその研究は眞の經濟學として不當のものとなつたことを示してゐる。即スミスはこの彼が重商主義の富の概念であると考へたるところのものに對して眞の富の概念を闡明して經濟學の眞の目的を明にし以て經濟學全體の研究を正しきものとなさんとしたのである。

斯く「國民の富」の性質を重じたるスミスは富國民論の冒頭に於てその性質を説明して “The annual labour of every nation is the fund which originally supplies it with all the necessaries and conveniences of life which it annually consumes,……”¹⁾ と云ふてゐる。

先づこの「國民の富」の内容について注意すべきことは彼が「國民の富」についてその消費性を重じたことである。即彼はこれを「國民が年々消費するところの必需品及便宜品」であるとして居るのであるがまたこれを國民の annual consumption (年々の消費) real wealth (眞の富) real revenue (眞の收入) 等と呼んで居る。即ち彼は眞の富は消費財であることを高調するものであつて、重商

1) Ibid I p. 1.

主義が「貨幣なる消費し得たる富」(the unconsumable riches of money)を富としたと考へこれを極力非難し、これに反して重農主義が尙狹きに過ぎはしたが而も「社會勞働によつて年々再生産さるゝ消費財」をもつて國民の富としたことを稱讚して居る。彼はまた「消費は總ての生産の只一つの目的であり眼目である」と述べて居る。而してこのことは彼が精神科學全般の目的を「人間の幸福及完成」を計るにありとしてゐることのみよりするも既に當然のことである。

次にこの「國民の富」の主體について先づそれが重商主義の場合に於けるが如く國ではなくして「國民自身即國民的社會を構成せる成員自身であることが注意せらるべきである。このことは彼が富の消費性を重することよりも當然であるがまた彼が精神科學全體の目的を「國家其他社會の一員としての人間の幸福及完成」を計るにありとすることよりも亦當然である。然しこの主體の問題につき更に注意すべきは彼が國民の中にも就中多數の貧しき人々を眼中に於て居ることである。このことは上述した如く國民中貧しき大多數のもの(the great body of the people)の生計を高めることを念としたることより見るも既に明なるのみならず、彼は「各國に於て下層民又は中流以下の人々の全消費が其量に於てのみならず其價値に於ても中流及中流以上の人々全體の消費量よりも遙に大である」と云ふことは注意すべきことである」と述べて居る。また富國民論全體の計畫を述べるに當つて其前四篇の目的につき「人民の大多數のものゝ收入が何に於て存するか

1) Ibid. II p. 176.

2) Ibid. II p. 126.

3) Ibid. II p. 370.

を以て之を説明する(To explain in what has consisted the revenue of the great body of the people)」を目的とするものであるとなし彼が社會多數の貧者について述べるに當つて用ゐて居る「the great body of the people」なる語を特に用ひてゐることは注意すべきことである。¹⁾

上述せしところよりしてスミスがその經濟學の目的とせしところの「國民を富ます」と云ふことは國民社會の大多數をなす貧しき人々に人間としての生活に必要な生計を與へる事を以て眼目として居ることが明となつたのであるが、現にスミスはその著の中に於て一方彼が *necessaries* (必要品)と云へるものが單に肉體的生命を支へる爲に欠く可かなざるところのものと云ふが如き狹義のものにあらざること²⁾を特に注意すると共にまた他方餘裕ある階級の奢侈を處々に非難して居るのである。

スミスはかくの如き意味に於て國民を富ますと云ふことをもつて彼の經濟學的研究全體の目的としたのであるが、然し更に此目的の有する近代的意義と此近代的意義をこれに與ふる根柢としての文化史的事情とが明にされねばならぬのである。先づその近代的意義より述べんに、スミスの經濟學の目的とせしところとギリシャ精神科學の目的との間に於ける形式上の一致の下にかく、實質上の意義の相違が明にされねばならぬのである。即スミスの經濟學はギリシャの精神科學の如く the happiness and perfection of a man, as a member of the state (國家の一員としての

1) 彼が社會の大多數をなす貧者の生計を重じたことは I p. 80. p. 83 等其他處々に顯著に現はれて居る。

2) Ibid. II p. 355.

人間の幸福と完成)を目的とするものなるが故に形式上に於てはギリシヤのそれと一致して居るものであるが而もギリシヤ精神哲學の目的とせし人間(目的)は、主として市民を意味するものであつて市民の下に隷屬せる貧困なる生産的勞働者階級を意味しないのであつてギリシヤ思想はかゝる奴隸階級を必然のものとして考へまた眞の文化の爲に必要なものであるとさえ考へたのである。例へばアリストートルに於ても此等奴隸は天の命であるとして考へられたのであるがスミスの富國論はこれと反對に社會大多數の貧困者の幸福をその主眼とさえしたのである。即ち彼は眞に全國民の富の觀點より經濟の總ての問題を考察したのであつて、斯くて彼に於て初めて經濟の總ての問題は眞に社會的諸觀點より考察されるに至つたのである。而してこの經濟學の目的の確立と云ふことのみよりするも彼は眞に近代經濟學の祖たるに價するのである。

然らば彼の經濟學の目的が斯る近代的意義を有するに至りし所以は何であるか。このことは前述せしところの彼の性格が人道的精神に豊なりしこと、當時多くの人々が貧困に惱み居りし事實のみをもつてしては説明し得べきものではない更に進んでスミスの立つた新なる時代の文化的事實に目を轉じなくてはならないのである。

先づ一方中世を通じキリスト教の洗禮を受けて人格尊重の念を加へ來りし近代的精神はもはやギリシヤに於けるが如き人間平等觀に止まり得ざりしと共に他方新に起り來れる時代はかゝる貧困の状態より人類を救済すべき可能の確信を人々に有せしむるに至つたのである。

即十七世紀に於ける諸文化國家に於る哲學者及自然科學者間の協力が數物的自然科學、其哲學的基礎附、其生活への應用を結果したことは人類の思想生活に一大革命をもたらし、に文化の新なる指導的諸思想が生れ出ることゝなつたのである。即理性の自律、認識による自然の支配、社會生活に對する理性的支配の理想、諸國民間の文化の進歩に對する連帶の觀念、科學に伴ふ人類の絶へざる進歩の信仰等が即それであつた。

この新なる思想的地盤に立つたスミスが科學の力により社會に多數の貧困者の存する原因を究明にし其等のものを經濟的に高上せしめ得る可能を信するに至るは當然であるが、更に當時英國政府の歐洲諸國中最も優秀なる制度の下に國民の生計の向上し行く状態を目標せしスミスが、國民的經濟生活の調和的發展の可能に對する信念を一層強めるに至るは當然である。

然しながら當時の文化史的事情はスミスの人道的精神をして單に一國民内の調和的發展の可能を信せしめたるに止まらず更に廣く國際的經濟生活の調和的發展の可能をも信せしむるに至つたのである。即ち前述せし新時代の思想生活の大革命がもたらせる人類の連帶的發展可能の思想が十八世紀の後半期に於てローマの全盛期以後未だ何時の時代にも見得なかつたところの繼續せる平和状態が各國間に存したと云ふ事實と相待つて生ぜし大文化の觀念 (der Begriff der Grossen Kultur) の下に於てスミスが國際的經濟生活の調和發展の可能を信するに至れるは當然である。斯くて彼の經濟學は結局彼が精神哲學の目的としたところの "the happiness and perfection of a

1) 此の状態を彼は富國民論中所々に述べて居る、Ibid. II p. 414. I p. 75. p. 79 等

man, considered.....as the member of a state, and the great society of mankind.¹⁾ (國家並に人類大社會の成員としての人間の幸福完成)を以てその目的とするに至つたのである。斯くしてスミス經濟學の目的たる「國民を富ます」と云ふことは結局國際社會に於ける諸の「國民を富ます」とことなるのである。スミスが其著の題名に於て特に Nations なる複數形を用ひたことは此意義に於て解することが出来るであらう。

以上に於て私はスミス經濟學の目的たる「國民を富ます」と云ふことの意味を十分明にしたと思ふが、前述せし目的因なるものの本質より、スミス經濟學の一切はこの目的より規定されるものであり従つてその對象もその方法も亦これより規定されることは後に明にするが如くである。私がスミスの此大著を特に「富國民論」と呼ぶ所以も此「國民を富ます」と云ふ目的が斯くして此大著全體の生命をなすものだからである。

此目的成立の基礎的條件たるスミスの調和的的人生觀及びこの人生觀の根柢をなす個人的並に文化史的事情も以上に於て明にされたのであるが、今これをマルクス經濟學の根柢をなす争闘的な人生觀及争闘的な個人的並に社會的事情に對比する時、彼の調和的な人生觀が彼の經濟學全體に現れて居る所以が最も明となるであらう。

私は進んでスミス經濟學の對象並に方法を考へねばならぬのであるがこれは改めて論ずることとする。

1) Ibid. II p. 259.